

孵化する都市

-世帯と暮らしの recomposition-



高良大樹

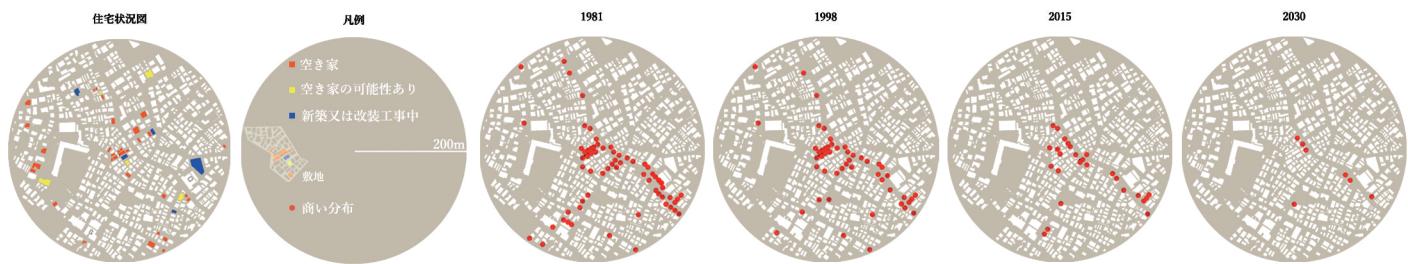
建築設計計画研究室

□プログラム

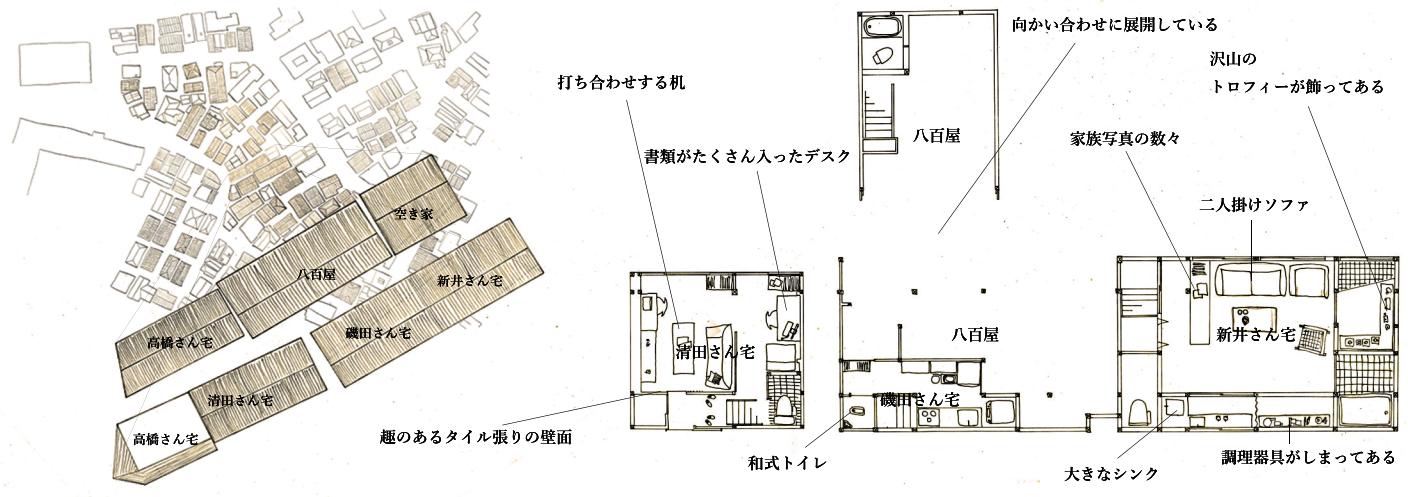
敷地は豊島区雑司が谷。商いと住宅が密接に併む静かな住宅地。戦後に賑わいを見せた商いは時間が経つにつれ衰退していき、今では世代交代のできない商店が点々と残っているだけとなった。あと15年後、2030年にはほぼなくなってしまうだろう。商いが減ると同時に空き家は増加し、まちのネガティブ要素として点在する。この住宅地の空き家状況を明らかにし集積地となる場所をモデル街区として選定する。



phase.1 時間軸における敷地調査



phase.2 ヒアリング調査と躯体の測量



法政大学デザイン工学部建築学科より引用

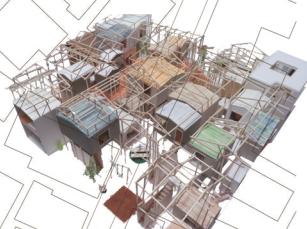


□コンセプト

住民達が自ら組合をつくりひとつながりとなった街区を想定する。世帯=住宅という完結した要素を分解するを解体し街区に既存する住宅の骨組みを残しながら自由に暮らしを組み替えていく。家族は住宅をまたがり敷地境界をまたがりまちそのものにベンチをおいたり好きなお花を植えたり、絵を飾ったりしながら自分の居場所をしつらえていく。次第にまちに暮らしのアクティビティーが溢れ出し新しいコミュニティーのかたちが生まれる。



1階平面図 1/1000



2階平面図 1/2000

phase.3 孵化する暮らしの未来予想図



64の家屋と84の世帯が暮らす街区



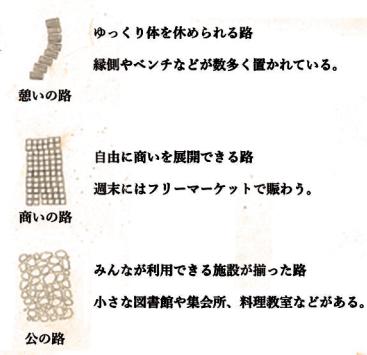
跨って暮らす世帯の色分けによるプロット

□ デザイン

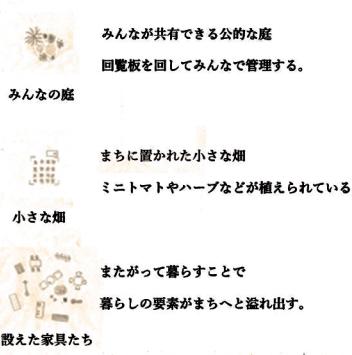
街区にある既存の躯体を残し新たに暮らしへ組み替えていく。刷新とした新たなまちをつくるのではなく既存の躯体を残したまま住み替えることでもとある木造未収地域の密度感路地空間のアクティビティーを保存すると共に住宅と住宅の隙間はポテンシャルとなり隙間に跨って暮らす家族、小路地を挟んで展開する商いなど、《まち》そのものに暮らす意識が芽生える。住宅という殻から孵化することで世帯はもっと豊かに暮らし始める。



避難経路の拡大とアメニティの付加



ゆっくり体を休められる路
緑側やベンチなどが数多く置かれている。



みんなが共有できる公的な庭
回覧板を回してみんなで管理する。

